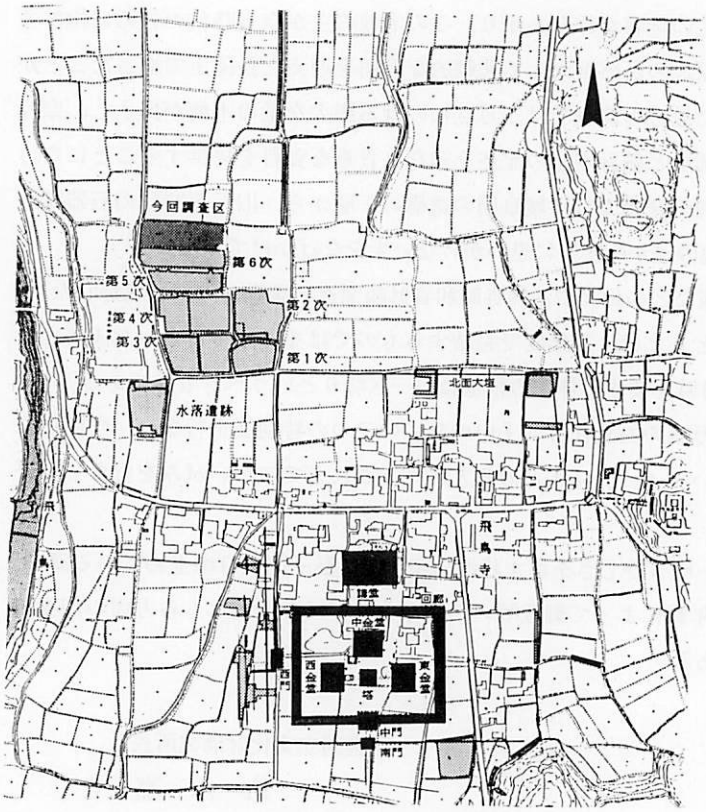
飛鳥地域の発掘調査

飛鳥藤原宮跡発掘調査部

1987年度，飛鳥藤原宮跡発掘調査部では，飛鳥地域において，石神遺跡，奥山久米寺，定林寺など12件の調査を実施した（18頁の別表参照）。以下に主要な調査の概要を報告する。

1．石神遺跡第７次調査

飛鳥寺旧寺域の西北に位置し，史跡水落遺跡の北に広がる石神遺跡は，いわゆる須弥山石や石人像が発見された場所であり，斉明朝の饗宴施設ではないかという想定で，1981年以来調査を継続している。６回の調査で，斉明朝から藤原宮期におよぶ多数の遺構を確認するとともに，なお広がりを持ち，短期間に多くの変遷があることがわかってきた。その範囲や具体的な性格の解明のため，本年度も第６次調査地に北接する水田で調査を行った。調査区は東西62ｍ，南北18ｍである。なお，戦前に調査されその後露出保存されている石敷（飛鳥浄御原宮推定地）が調査区のすぐ西側にあるので，これを西区として清掃・実測調査を実施した。検出した遺構はこれまでと同様に４時期（Ａ期：斉明朝，Ｂ期：天武朝，Ｃ期：７世紀末，Ｄ期：藤原宮期）に大別できる。



石神遺跡・水落遺跡周辺調査位置図

Ａ期の遺構　飛鳥寺（崇峻元年＝588年創建）と水落遺跡（斉明６年＝666年設置の水時計）の北側に東西大垣SA600が作られ，石神遺跡の区画が形成された時期である。第４次調査で検出した大井戸 SE800の存続する時期で，井戸から北へのびる石組溝の変遷などを手がかりに，これまで３期に細分してきた。しかし今調査で井戸から北流する石組溝をさらに１条確認したので，従来のＡ－１期をＡ－２期，Ａ－２期をＡ－３期と改め，あらたに検出した石組溝にともなう遺構をＡ－１期とする。

A－1期　石組溝SD1210は今回あらたに検出した南北溝で，さらに北へのび，南はSE800に連なると思われる。側石の上半は破壊されているが，本来は暗渠であったと思われる。A－1期に先行する遺構として，斜行大溝SD1240がある。長さ約7m分を確認しさらに南北にのびる。溝幅は約10mに復原でき，埋土中に多量の炭化物を含み，飛鳥Ⅰ段階の土器が出土した。

A－2期　石組溝SD900は，A－1期の石組溝SD1210の東にある南北方向の暗渠で，井戸SE800から北へのびる排水溝の延長部でもある。

A－3期　この地域が最も整備された時期である。南面の東西大垣SA600や井戸SE800周辺の建物は踏襲するが，A－2期以前のその他の遺構をすべて廃し，全面に整地を施す。この整地後に土拡SK1150・1151・1152が掘り込まれる。SK1150は，南北約9.5m，東西約7m，深さ約1.5mの大規模なものであるが，これらの掘削の理由は不明である。これらを埋めたてて大規模な造営が行なわれる。A－3期の遺構群は，南北廊SC820を境に東西に分けられる。

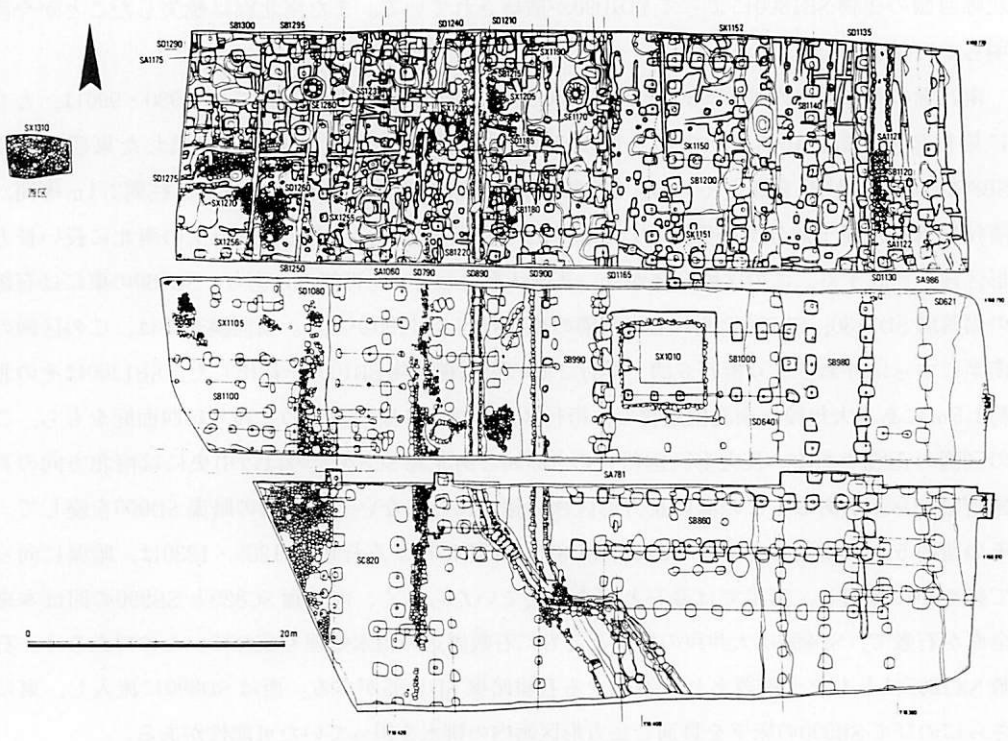
南北廊SC820は梁行1間（5m）の単廊で，桁行7間分（2.5m等間）を検出した。南端は大垣に取り付くと考えられ，大垣から北35～41間目に相当し，総延長101.5m以上となる。従来の調査所見では，南北廊の東西両縁には石組の雨落溝SD790・1080があるが，今調査区では，南北廊西側の建物SB1300によってSD1080が破壊されている。また南北廊は焼失したことが今回明らかになった。

南北廊の東には南北棟SB980・990・1200と石組溝SD980が整然と並ぶ。SB980・990は，ともに梁行2間，桁行16間以上の同一規模の南北棟建物で，第5次調査で検出した東西棟建物SB860の両端に柱筋を揃えている。SB860・980・990の3棟は桁行・梁行とも柱間2.1m等間，隣棟間隔も柱間1間分で整然とした配置をとり，東西幅25m，南北40m以上の南北に長い長方形区画を形成する。この区画全体が低い基壇状を呈していた可能性があり，SB980の東には石組の雨落溝SD1130，SB990の西にも雨落溝の東側石列SX1190がある。前回調査では，この区画の南半にすっぽりおさまり桁行6間・梁行2間の東西棟建物SB1000を検出した。SB1200はその北約3.5mにある大規模な南北棟建物で，桁行8間・梁行3間の身舎のまわりに四面庇をもち，この区画の正殿である。長方形区画西辺のSB990と南北廊SC820とのほぼ中央には南北方向の石組暗渠SD890がある。この溝は長方形区画の建設にともないA－2期の暗渠SD900を廃して，その西約5mに新設したものである。SD890の東西に接する石敷SX1205・1230は，暗渠に向って緩やかに傾斜し，南半では蓋石と面を揃えていたらしく、南北廊SC820とSB990の間は本来全面が石敷で，SD890は大井戸の排水とともに石敷周辺の雨水処理も兼ねていたのであろう。石敷SX1205にともなう施設として斜行する石組暗渠SD1185がある。西はSD890に流入し，東にさらにのびてSB990の床下を貫通し長方形区画内の排水を担っていた可能性がある。

南北廊の西には建物SB1300とその南側に広がる石敷SX1270，石組溝SD1260・1290などがある。SB1300は，桁行3間以上・梁行3間の身舎の東・南・西に庇がつく南北棟建物で，おそらく四面庇建物であろう。SB1300の造営は南北廊より遅れ，南北廊と同時に焼失したと考えられ

る。石敷SX1270は，前回検出したSB1100北方の石敷SX1105と一体のもので，SB1300の南庇に接して大きな見切りの石列を東西に並べ，その他の部分には人頭大の石を用いる。今回実測調査した西方の石敷SX1310はSX1270と一連のものと思われ，斜めの見切りの石列があり，北を一段高くして大ぶりの石を置き，南半に小ぶりの石を敷く。南北廊の西側には全面的に石敷が広がり，その間に四面庇建物が並んでいたと推定される。斜行する石組溝SD1260は石敷SX1270の見切りから6ｍ南にあり，西端を石敷になじむように特殊な納め方とし，東半分は南北廊を斜めに横断し東雨落溝SD790に注いでいたようである。調査区北端にある小規模な東西石組暗渠SD1290は，南北廊の建設とともに設けられ，東端は西雨落溝に合流していたと考えられるが，SB1300の柱穴で寸断され南北廊西雨落溝の抜取溝によって壊されている。

B期の遺構　A期の建物群が南北廊などの焼失を機に取り壊され，南面大垣がやや南に作り替えられ，総柱建物が整然と建ち並ぶ時期である。掘立柱建物5棟，掘立柱塀4条などがあり，遺構の方位が北で東にやや振れる。2時期に細分できるが，1時期にまとめて報告する。調査区東端のSA986は前回調査区から北へ続く南北塀で，7間分を検出し，12間分を確認した。SB1120はSA986の西にある桁行2間・梁行1間の小規模な南北棟建物で，南北に各1間の塀



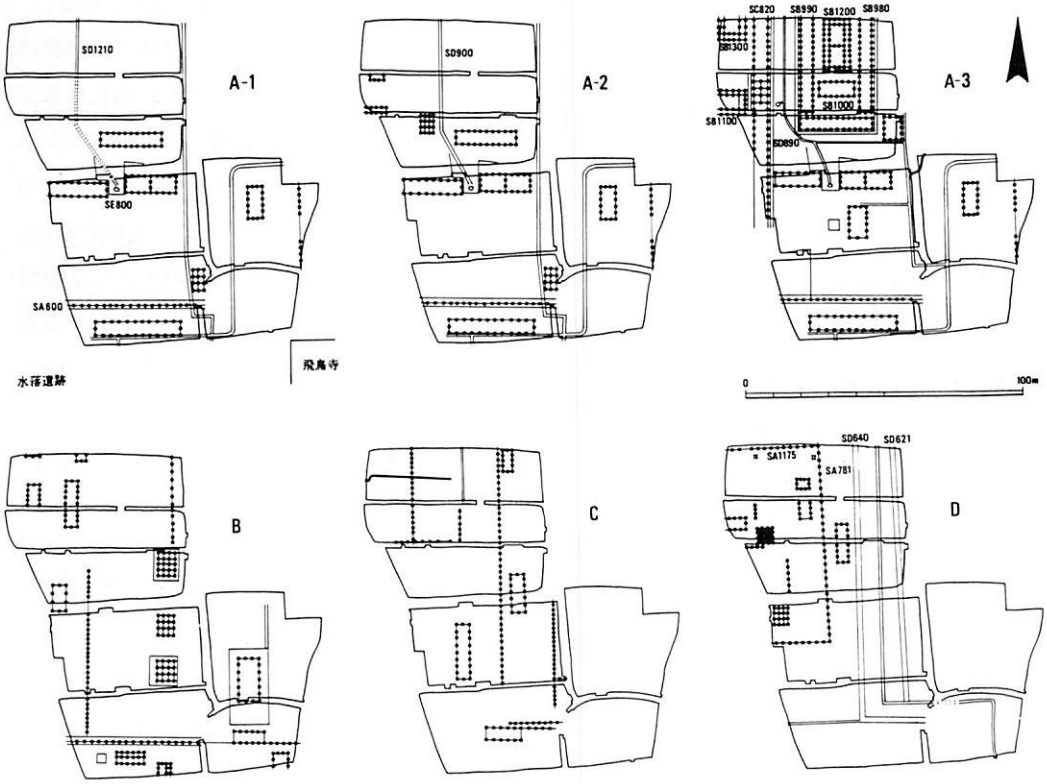
石神遺跡第5・6・7次調査遺構配置図

SA1121がとりつく。南北塀SA1122はSB1120より新しく，３間分を検出した。SB1220は前回調査区から続く桁行８間・梁行２間の南北棟建物，SB1215はSB1220の北にある桁行２間以上・梁行２間の南北棟建物，SB1250は桁行４間以上・梁行２間の南北棟建物であり，SB1295は南北建物の南妻部分であろう。

Ｃ期の遺構　遺構の方位は北で西へわずかに振れる。掘形はＡ・Ｂ期より小ぶりになり，埋土に炭を含む。調査区東部の南北塀SA1060は，10間分を検出した。前回調査区でも６間分を検出し，Ｂ期としたが，造営方位の振れがＣ期の遺構に近いので改めた。SB1140はSA751の東にある桁行４間・梁行２間の南北棟建物である。素掘り南北溝SD1165は調査区中央やや東寄りにあり16ｍ分を検出した。素掘り東西溝SD1275は調査区西半にあり23ｍ分を確認しさらに西にのびる。

Ｄ期の遺構　遺構の方位は北で振れるが，わずかな差があり２時期に細分できる。柱穴・溝ともに炭を含み，Ｃ期の遺構と酷似する。

Ｄ－１期　調査区東端の素掘り南北溝SD621は幅約2.5ｍ・深さ0.5～0.6ｍで，17ｍ分を検出した。第３次調査区に南端があり，総延長92ｍとなる。南北塀SA781はSD621の西24ｍにあり，



石神遺跡主要遺構変遷図

7間分を検出し，調査区北端で西に折れ，SA1175となる。西へ10間分続き，1間おいてさらに西に続く。SA781は第4次調査区でも西に折れ，南北約70m・東西32m以上の範囲を区画していることが判明した。この区画内にSB1180，SE1170・1280がある。SB1180は桁行3間・梁行2間の東西棟建物，SE1170・1280は円形の石組井戸で藤原宮期の遺物が少量出土した。

D－2期　D－1期の区画が存続し，素掘り溝SD640・1135と多数の土拡がある。SD640は幅約2.5～3m，深さ0.5～0.8m，SD1135は幅約0.5～0.7m，深さ0.1～0.2mである。両者は心々距離7.5mで，規模に差はあるが道路の両側溝であろう。この道路は南北総延長100m以上あり，第3次調査区で東へ折れ，第1次調査区で南へ折れ飛鳥寺寺域の西辺にそってさらに南下するものとみられる。

出土遺物　土器には縄文時代から平安時代に至る各時期のものがあり，特記すべきものとして東北地方の黒色土師器が数点ある。瓦はきわめて少なく，軒丸瓦が2点出土したにすぎない。金属製品では鉄製品が大多数で，鏃・斧・刀子・鑿（たがね）・鋏（かすがい）・釘・鎌・紡錘車などがあるが，出土量は第4・5次調査区に比して少なくなる傾向にある。

まとめ　7次にわたる調査で，東西・南北とも最大120mの範囲を調査したことになり，遺構の分布状況がかなり明らかになってきた。今回の調査で得た重要な知見を時期別にまとめる。

A期　南北廊の東側の区画内で，四面に庇をもつ正殿SB1200を検出した。この区画の建物群は，他に例をみない特異な配置であり，縁辺を周囲より一段高く基壇状に整えており，南北廊東側の中枢的施設である。南北廊の西側にも大規模な建物群がある。建物の周囲には広い石敷がありさらに西方に続き，この区画にも重要な施設が存在していた。南北廊の東西の区画は一連の施設ではあるが，用途は異なると考えられる。これまでに判明した遺構の状況は，宮殿や官衙，あるいは居宅とも異なる特殊なもので，その性格について即断はできない。このような建物配置の起源，史料との照合など，今後の調査の進展とともに十分な検討がまたれる。また，南北廊とその西の建物SB1300は焼失し，それを契機としてA期の遺構が廃されたと考えられる。これは続くB期の遺構の性格を理解する上で重要な知見といえよう。

B・C期　A期とくらべ遺構が散在する。B期では第5次調査区以南にある総柱建物にかわり，南北塀や南北棟建物が数棟建つ形にかわる。C期も南北塀や小規模な建物が存在するだけで，この配置や性格については今後の調査の進展にまたれる点が多い。

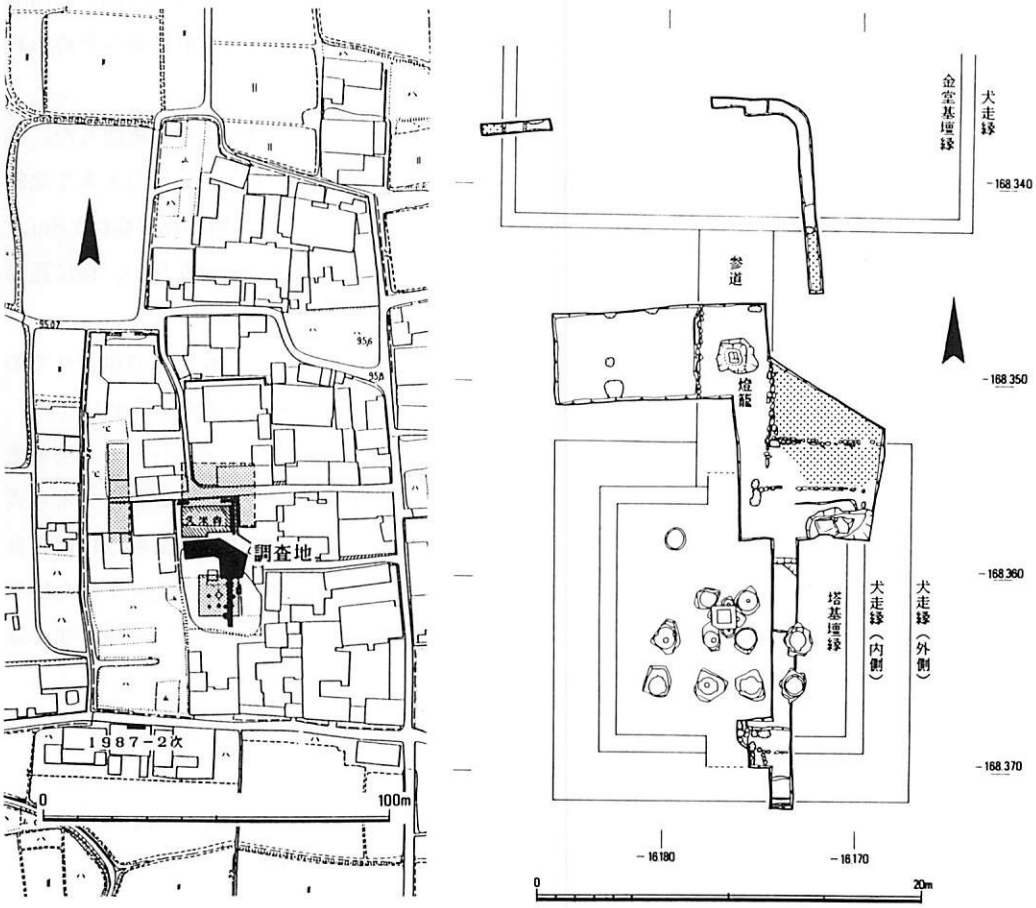
D期　南北道路の西に展開する掘立柱塀による大きな区画と，内部に点在する建物・井戸・土坑などの施設が明らかとなってきた。遺構の性格については，出土遺物の検討によっていずれはっきりとするであろう。

このように石神遺跡ではわずか半世紀の間に，幾度もの造り替えや改修が繰り返されていたことが明らかになった。大がかりな改作の前後では遺構の状況が一変しており，この地域の性格，機能はめまぐるしく変化している。それだけに，ここが飛鳥の中でも重要な施設を設けるにふさわしい場であったのであろう。その意味で，今後の調査の進展が大いに期待される。

2．奥山久米寺の調査（1987－1次）

奥山久米寺の庫裡改築計画に伴う事前調査で，塔跡と庫裡の間の約100㎡を調査し，併せて塔跡基壇と庫裡の東側と北側でトレンチ調査を行った。

塔　塔の基壇外装は残っていないが基壇の掘込作業・地覆石抜取跡を検出し，一辺約12ｍの基壇であることが判明した。掘込地業は旧地表面から深さ約１ｍあり，版築による基壇土は旧地表面上0.65ｍ分残る。側通りの礎石が概ね旧位置を保って基壇土上にあり，基壇高は1.45ｍに復原できる。基壇外装は，当初は地覆石に花崗岩を，羽目石等には凝灰岩を用いており，後に地覆石に花崗岩の川原石を用いて改修している。基壇上には礎石が10箇残り，方三間の平面に復原できる。柱間寸法は2.2ｍ等間。心礎位置には鎌倉時代の十三重石塔が立ち，四天柱礎石



奥山久米寺周辺調査位置図

は石塔を立てるために中央寄りへ移動している。四天柱の礎石には柱座を，側柱の礎石には柱座と地覆座を造り出す。地覆座は中央間が幅0.6m，両脇間が0.3mで，中央間が扉構え，両脇間は壁としたものであろう。基壇周囲には人頭大の川原石列が２条廻る。共に基壇外側の犬走り状の壇の縁石で，一辺の長さは内側13.8m・外側18.5mであり，内側の石列より外方には瓦を敷きつめている。基壇南辺と北辺の中央部に階段の痕跡がある。北辺では地覆石の抜取り痕跡があり，南辺では後補の地覆石と踏石の一部が残る。塔基壇の掘込地業よりやや北にずれて一段階古い掘込地業があり，塔北面段階部で北側へ広がっている。塔以前の別の建物のもの，地業の工程差の二様に考えられる。

参道と燈籠　塔の北縁部内側の犬走りの北約１mから，3.5m間隔で２条の石列が北へのびる。石列間は塔と金堂をつなぐ参道であろう。参道上の塔基壇北縁から約7.5mに直径1.5mの円形の穴があり，地表下0.85mに榛原石の板石が据えられ，柱状のものの抜取り痕跡がみとめられた。燈籠の竿もしくは幢支柱を据えた跡と考えられる。

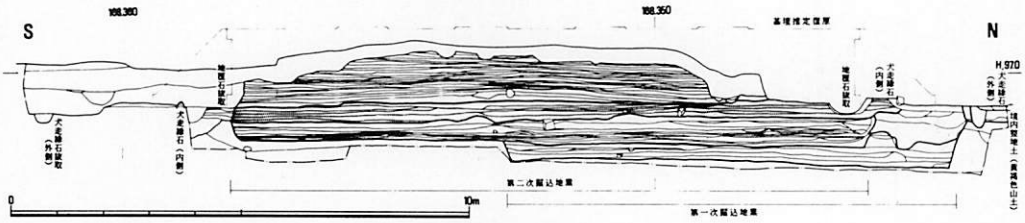
金堂　塔基壇北辺の13m北に金堂の基壇がある。基壇縁は南辺と西辺の一部を確認した。参道中軸を基準にすると，金堂基壇の東西幅は23mとなる。南北長は不明だが，奥山久米寺北側の民家敷地内にも基壇土らしき山土が広がり，12m以上と推定できる。基壇の現存高は0.3m，掘込地業の深さは1.2mに及び版築を施している。基壇外装は当初は凝灰岩等を用い，後に花崗岩の川原石を用いて塔と同様に改修している。

遺物　瓦と土器類が出土した。塔所用の瓦は山田寺式軒丸瓦と四重弧文軒平瓦の組合せである。塔基壇土内から，７世紀前半の軒丸瓦・鬼瓦・丸瓦・平瓦と７世紀後半の土器が出土した。

遺構の造営時期と伽藍　塔は７世紀後半の造営で山田寺式軒瓦を用いたと考えられる。塔基壇土中に７世紀前半の瓦が多く含まれることから，古い掘込地業を用いていわゆる奥山久米寺式を含む瓦で葺いた７世紀前半の建物が前身に存在した可能性もある。塔周辺の瓦敷きには奈良～平安時代の瓦が含まれ，そのころ境内の整備が行われたとみられる。金堂の造営年代を知る手がかりはない。参道の基壇は出土土器から７世紀後半の築造と考えられるが，やや時期が降る可能性もある。燈籠の竿の掘形の掘削は参道と同時と推定され，廃絶は10世紀と考えられる。

従来の奥山久米寺周辺の小規模調査の成果を合わせると，奥山久米寺の伽藍配置は，塔・金堂が一列に並ぶ山田寺式もしくは四天王寺式である。伽藍中軸線から西面回廊内側まで約27m，金堂を山田寺程度の規模と仮定すると金堂・塔の心々距離は約27mとなる。この距離は高麗尺の750尺に当たり法隆寺若草伽藍とほぼ同規模で，山田寺より回廊東西幅がやや狭くなる。

今回検出した遺構は従来知られた奥山久米寺式軒丸瓦と直接結び付くものではなく，今後前身の遺構及び金堂・講堂・門等，他の堂舎の解明が望まれる。　（岩永省三）



塔基壇断面図